結草
kusamusubi
publishing house:moriyama 2-19-32 Kanazawa
Jodo Shinsyu Jhokoji phone 076-252-4922
http://www.spacelan.jp/~jhokoji./2005.10.17

ほうおんこうとわたし

専念寺住職　平田　力精

生死の苦海ほとりなし
ひさしくしずめるわれらをば
弥陀 弘誓のふねのみぞ
のせてかならずわたしける。
『高僧和讃』龍樹菩薩三

秋の天気は気まぐれですが幸いよい天気に恵まれまして、皆様方には出難きところを本当にようこそ参詣を賜りましてありがとうございます。ただいま紹介賜りました、平田でございます。みなさまのお顔を見ておりますとなにやら怪訝な盗人を見てるような…

出会いというのはまことに不思議なものでございまして、当寺のご住職と九月のことでした。金沢別院ではじめてお会いしました。これが縁となりまして年に一度の報恩講さまにご縁を結ばさせていただいた次第です。

皆さんの中でどこかでこの顔どこかで見たことあります。ほとんどのかた初めてかなと想っております。こやつ、どこから来たもんやらという顔つきしてますな。

髪は薄いしいくつや、とかね。輪島から来ました。人口わずか二七〇〇の小さな町でございます。

私の処は町はずれの、千枚田から少し下がったところです。最近は千枚田で結婚式が挙げられるんです。市が奨励してるんです。もちろんお金はでるんです。ところが最近は離婚が増えたところからめっきり数が減ったそうです。何もない寂しいところ、まあ寺の数が多いのが自慢といえましょうか。

お寺の数が多ければ沢山の方がお詣りにおいでになるかというとそんなもんじゃない、なあーもお詣りがないがや。

みなさま方は”報恩講”ほうおんこう”と平生から親しんでおられることです。“ほうおんこう”を別の呼び名でいいますと”親鸞聖人御影向のみざ”といわれます。あまりききなれんかもしれんがね。「影」を“よう”とか“えい”ともいただくんです。本願寺の御影堂がこの字なんですね。さらに“ねい”と呼ぶ場合もあります。

「御真影」を“ごしんねい”とここでは“よう”といただきますがね。平生私たちは“かげ”といただいてますが“ねい”“えい”も「姿」といただくのです。「向」はそのままでいい。「御影向」いうこころは弘長二年十一月二八日午の刻、頭北面西右脇に臥して九十歳にしてお浄土にお還りあそばされた親鸞さまなれども、末世の衆生に心が残ってならんとぞと、わざわざこの年に一度のこの「報恩講」さまにちなみ今親鸞さまがこの本堂にお姿を現されたのです。ここにお集まりの方がた一人一人にまさに向かっておって下さるのです。そこがこの場所なのです。すなわち「報恩講さま」が勤まっているこの処である。それを“親鸞聖人御影向のみざ”とこう呼ばれるのであります。

わざわざ親鸞さまがこの年に一度のこの「報恩講」さまにちなみこの本堂にまさにお姿を現され、誰あろうか今日お集まりの方々、一人一人に向かってきてくださるのです。言い換えればひとえに一人一人が仏法をいただく中に“信心決定”なさっておられのか？或いはこの親鸞と同じく信にもとづく身の上となっておられるのか、わざわざご案じなされ、いまここにお姿を現され

私たち一人一人に向かってきておって下さるといえますね。
さあ、みなさま方どうです！
今年も余すところ何日ぐらいと思います。そんなことあんまり氣にしとらんがかあ。なんやしらんが一日すんだわ！てなもんかな。なんや寂しいな。
どうしても、報恩講の時節を迎えますと一年というのは早いもんやなあ！とつくづく思う。今年も残すところ七五日。多いか少ないかはそれぞれですが、しかし確実に二五〇の日が過ぎ去ってきたのですよ。
みなさん、どうでしょう、まだ早いかもしれんが、一度この二五〇日を振り返ってみて下さい。
今日・明日が報恩講さまではございませんわ。三六五日がまさに真宗の流を汲むものにとっては報恩講でなければならないことはいうまでもありません。
ところが二九〇日過ぎでみまして、どうですか。一片たりともこの間にこれで良かったなどという心、いうならば“報恩感謝”とか”報恩謝徳の気持ちを持れた日は何日ありましたでしょうか。
今年はいろんな自然現象に悩まされました。昨年は夏がなかったでしょう、違いますか。長雨と日照不足でね、夏がございませんでしたね。梅雨前線の後に来たのは秋雨前線でした。今年は正反対ですね。三〇度超す日が三〇日も続いたんです。
また八月の下旬からは毎週台風が来まして、沖縄をはじめ台風の玄関口に当たる地域の方々、本当に気の毒な思いをされましたね。畳を代えたり瓦を葺き替えたり余裕なんかないいんです。次から次えと来るんですから。
　さいわいにもこの石川県は、白山のおかげか知らんが大きな被害を受けることはなかった。富山・福井は豪雨によって大変な被害に遭って、尊い命が失われてましたね。今悩まされているのは熊ですがね。山中ではお初夜も勤めることができなんだ。危ないというて。去年の冷夏からずっと影響して熊のおでましになったと。ずっと連なってるんです。じつは私の寺にも熊がいるんです、うちの妻や（笑い）なかなか里帰りせんのやわ！居座ってしもうて、わたしゃ逆らわんのやがね！（笑い）熊とも妻ともいうしフセイン大統領ともいうしね。鉄砲の弾で銃殺されますからね(笑い)。大変なもんやね。山へ行くなというても行くがやな。熊が出るというのに山菜採りにいくがや。変なもんですね。
熊と人間の共存なんてなかなか難しいね。熊が出てくりゃ殺さにゃならん、殺したくなくともね。わたしの命が危ないからね。猟友会なんか呼んでね。
　夏テレビ見とったでしょう、あれー森山にやぁテレビないのけ（笑い）オリンピック、オリンピックでしたね。沢山のメダルを獲得しましたね。
　一方、イラクでは戦争が現実に起こってますね。わたしたちはいながらにして戦争と平和を眺めていたんですよ。ただ嫌なものやら臭いものには蓋して、オリンピックばっかしワイワイ拍手喝采してですね。もちろん拍手喝采をしてたの他ならぬ私たちなんですよ。
漸く気づいてみれば二九〇日過ぎて、年に一度の報恩講さまですわ！どうですか。振り返ってみれば報恩感謝の日々を歩んできたか問われますね。貴方はといわれればとてもじゃないが、そういった心少しも持つことができなかった私たちなんですね。
　そのような今日を生きる私たちの身を案じ、更には私たちのこれからの行く末を案じ、とてもじゃないが、心配で心配でおられんやわい。どうか年に一度の報恩講さま！一人一人が縁としてこういう身上になって欲しい。こういう歩みをして欲しい、そういう願いの下、わざわざ親鸞さまがこの本堂に今お姿を現され、私たち一人一人にはまさに向かってきておられるのです。
　はじめに深い信心を著された、親鸞さまのご和讃をいただきました、「生死の苦海」とあります。生き死ぬという字です。他人さまのことではないですよ。みなさま方一人一人の生と死でございますよ。平生これを厳しく見て歩んでゆかねば勿体ないことですよ。
死というもの、皆さんの顔を見とれば他人は死んでもわしゃ死なぬという顔しとる。（笑い）
いずれは死を迎えて逝かなならんのであって、まだまだこうもああもしていかな！死は後の後のことだと。一人一人が奥の方に引っ込めておられるんじゃないですか。
ときおりテレビを見ておりますとね、今はイラクのことがおもてだって出てきますがねその前にアフガニスタンの戦争があったでしょうね、この頃アフガニスタンのことやかましくいわんね。
その後どうなったか興味ありませんか？悲しいことに次第に記憶が薄れてゆきます。

たとえばお詣りが終わってご自宅に帰って、夕飯のお支度をされる方も多いでしょうが、台所で水道栓をキュッとひねるとなにが出てきます！みなさん、水、出てきますね。日本中で栓を捻るとシャーと出る水に勿体ないなーと思う。私たちの生活の上に水がなかったらどうして生活していけるもんかな。そこに勿体なぁと手を合わせる人はどれだけおりましょう。

またトイレへいけば皆、水洗ですね。コックを回せば水はシャーと流れますね。流れなかったらどうなります。生活できますか？部屋でご飯食べれます？とてもじゃないが食べれんわね。あぁー勿体ないもんやな！

金沢くりゃ、銭さえありゃ、何でも手に入る。世界中のものがね。また柱のスイッチをババと入れれば明るくなりますわね、電気が無ければどうなりますか。水や電気がなけりゃうどうして生活していけるでしょうか。そんなこと思う人どれだけおられるでしょうか。お金さえ出せば欲しいものが手に入ることを当然としてるんですよ。あたりまえをあたりまえにしてるんですよ。イラクを見て下さい。電気・水道・学校・もありません。比してみると我々はこんなにも恵まれた環境にあるんですよ。こうして暮らさせていただいていることを当然としてる。

たしか平成一三年やったと思いますが、福井でドカ雪のためご満座の報恩講が急遽とり止めになったことがございました。九〇センチ位でしたか、怪我や事故を鑑みれば当然なことでしょうね。脱線しますがね、可笑しなことにね、お説教のご縁がなくなれば布教師は邪魔なもんやわ。荷物まとめてサッゝと能登に帰ってくれりゃいいのやわ。（笑い）ところが電車がストップしてるし、道路の渋滞閉鎖、でお寺にまる二日間お世話になったことがありました。なんもせんとね。申訳のうて、ようやく三日目に市内のホテルに移ることができました。住職にお礼を述べでようとすると、ーそんな水くさいことといわんと寺に泊まっとりゃいいーと言われたがそんなに迷惑かけられんからと、辞退した時の住職の嬉しいそうな顔たっらね！（笑い）やれやれ！

途中で車が雪で埋まり、長靴で歩いてホテルまでいきましたんや。着いたはいいがお腹が減ってね。食堂を探すがみんな閉まっててた。

この時代お金は少々あるんですけどね、食べるものがないんですよ。弱りました。さいわいコンビニエンスストアを見つけホットしたんですが、空っぽ、なにもない。（笑い）弁当運ぶトラックがこれんがやね。どうにもならんからカップラーメンで我慢したんです。

明くる朝、超満員の臨時電車で金沢、穴水と乗り継ぎ終点輪島に着たんです。穴水からは運転手をいれて三人ですよ。運転手の終点のアナウスを聞いておりまして考えされました。ようやくついた安堵感は確かにあるのですが、“次は終点”と言う響きが気になったんです。

よろしいかな、皆様も私も一日ゝ、一足ゝ、一駅ゝ確実に人生の終着駅に向かっているんですよ。お間違えなく。ストップもバックできんがやぞ。バックできりゃいいね。私もつくゞ思う。バックもストップもできんね。

また“お忘れ物のないよう、お気をつけてお帰り下さい”と聞いた時なにをみなさんは考えますか。

なにもかも当たり前としてる我々、自分の命すら生きていることを当たり前としている、傲慢極まりない今日の私達に向かって、“お前さまそれでよいか”“それで間違いないのか”“それで満足しているのか””忘れ物がないか”と正面のご影向の弥陀さまがまさに私たちに問いかけをなさっておられるいうことです。

私も皆様方もまさにここに向かって歩んでいかねばならんのや。

全国的に葬儀会場・セレモニーができてますわね。みなさんもセレモニーへいくのと違いますか。あそこへ行けば難の心配もイランね、暑くも寒くもない人任せ。それが告別式という風に代えてしもうたんじゃないですか。告別式というのはただ単に先立たれた方への別れを告げる会という意味しかない。あの人いい人やった、町のためああもやった、こうもやってくれた、なんといい人がねーと故人を偲ぶ、大体それくらいに終わらししもうて、自分に対する問いかけが無くなってしもうた。

他人の事にしてしもうてるんです。違いますか。最近は生きとる間にに告別式をだす人があるんですわ。

昨年八月頃でしたか、葬儀の立僧の依頼があり、いって何というお方が亡くなられたのか尋ねると、いや一寸言えませんと、変に思い再度尋ねても言えぬと。葬儀は明日一〇時と告げられ、今夜のお通夜は？いや勤めませんと。翌朝いってみると。会館には椅子一つなく、丸いテーブルがあり上にビール、ウーロン茶、ジュース、鶏の足、唐揚げ、野菜が盛ってあるんです。

正面には故人のの大きな写真が飾ってありました。みなさん深々と頭を下げてましたね。私もです。
しかし親戚等の人達誰も悲しんでるようもないのに驚きましたが。とにかく案内され僧侶控室へいきました。お手次の方が七条袈裟をつけ座っておられたがその横に亡くなった人が座ってるがや、初めて生きてる死人を見たがや。吃驚した。
これは生きてる内に葬儀を、いわゆる生前葬というがやと教えられました。「正信偈」だけをあげてもろうもんだけもろうてサッサと帰ってきたわ。世の中変わった！変ですよね。
　あくまでも葬儀というのは先立たれた方を縁として、残ってる私が向かえていかねばならぬものに対して、ホントに厳しい心を持てるのか或いは持てないのか、それが問われるのが葬儀ですよ。
『道俗時衆等　各発無上心　生死甚難厭　仏法復難欣　共発金剛志　横超断四流　願入弥陀界　帰依合掌禮』（勧衆偈）と棺前のお勤めがありますね。お坊様も在家の方も各に先立たれたお方を縁にして一人一人が後生の心を興して欲しいとお経の初めにありますね。
さらにもう一言申します、金沢の方で人がお亡くなりになりますとき、「弔い」と言うこと聞きますか。今は弔いと言いますと弔いという字を使いますが本来は「訪」と書きます。七高僧のお一人、道綽禅師さまは「前に生まれしものは後を導き、後に生まれんひとは前を訪え、連続無窮にして、願わくは休止せざらしめんと欲す。無辺の生死海を尽くさんがためのゆえなり。」とおっしゃる。そこの字は訪と書きます。よく家の前に訪問販売固く禁じるとよく書いてあったね。これは尋ねるという字です。
本来の「とむらう」という意味は先立たれた方、お通夜に又葬儀に足を運ばれた方々一人一人に対して、今まさに身をもって語りかけていて下さることを一人一人が心して尋ね詣らせていただくのが本来の「訪」の意味でしょう。仲のよかったお方が、長い間お付き合いのあったお方が、通夜に葬儀に足を運ばれた我々一人ゝに身をもって語りかけておって下さることを心して尋ね詣らせていただくことなのでしょう。
人の話ではなかった。息ひきとって言葉も発する事もできない方が私に身をもって語って下された。
あんたはまだまだ死ぬことを人の事やら後のことにしてるかも知らんけども、我が身も否応なしに死を向かえていかねばならぬ身の上であることをおさえておかねばならない。
今宵もお会いさせていただきましょうと、明日もお会いさせていただきましょうと、ここで上手をいうたってほんまにここで会えるかどうか、明日会えるかどうかね。
ほんま、約束のできん命を私たちは抱えとるんじゃないですか。
「無常」と蓮如さんは」おしゃったでしょう。常に一刻ゝ色・形は変えていくことです。わたしも母親の中に生を受けてより年を経るとこういう風貌になります。皆様方も生まれながらにそういう顔しとったんじゃない。（笑い）ポチャポチャとしとった時もあったんや。無常なんですよ。なにか突発的なことが起こったときのみが無常なのではない。ということはこの我が身も娑婆に身を置く以上、何時その死を迎えることとなるのか、それは分かりません。
しかし、何時この私が死を迎えることとなっても、慌てることなく、安心して死してゆきたいと思うのは私だけではないでしょう。
大事なことは、生まれ難い人に生まれさせていただき幾多の苦難にも遇させてもろうた、みんな見えぬお力添えのおかげと氣づかせてもろうたと謝する。
俗に言えば地に足がついた確かな人生というのでしょうか。
一筋に弥陀の弘誓をたよりとして、ご苦労のうえに獲得されたご先祖の内なる世界。かれらの真宗人としてのおおらかな後ろ姿を見聞するにつけ、自然と頭が下がります。
ご先祖と同様私もまた、たた、ナンマンダブ、ナンマンダブと仏の御名をたたえ、歩まさせて頂くことにほかならぬことです。
このように厳しく今日の私に、問いかけて下さってる仏様、さらにはこの報恩講さまにこの本堂に姿を現された御影向の親鸞さまへと私たちも答えさせていただかねばならなかったのではないでしょうか。
時間がきました。このあたりで昼の法話終わりにいたします。ありがとうございました。